

青い玉と銀色のふえ

小川未明

青空文庫

北きたのさびしい海うみのほとりに、なみ子この家いえはありました。ある年とし、まずしい漁師りょうしであつたおとうさんがふとした病びょうき気で死ぬと、つづいておかあさんも、そのあとを追おうようにして、なくなつてしまいました。かねて、びんぼうな暮くらしでしたから、むすめのなみ子こにのこされたものは、ただ青あおい玉たまと、銀ぎんいろ色のふえだけでありました。

青あおい玉たまは、ずうつと昔むかし、先祖せんぞのだれかが、この海うみべのすなの中なかからほり出だして、それが代だい々だいいえ家いえにつたわつたのだということがありました。

なにかねがい事ごとがあるとき、この青あおい玉たまにむかつて、真まごころ心を

こめておねがいすると、その心こころが神さまかみに通つうじてかなえられると
いうので、おかあさんはこの青い玉あお たまを、とてもだいじにしていま
した。

玉たまはつやつやしていて、深い海ふか うみの色いろのように青黒あおぐろく、どこま
で深いふかのか、底そこが知れぬように、じつと見みつめていると、引き入ひきい
れられるような気きがしました。

そして、真まごころ心こころをこめておいのりをすると、青い玉あお たまの表おもてに、海うみ
の上うえをとびさる雲くものように、いろいろなことが絵えになつてうかん
できて、ゆくすえのことをおしえてくれるのでした。

また、あるときは、青い玉あお たまがまっかにほのおのようになつて見み
えたり、玉たまにひびがはいったりして、不安ふあんな気持きもちちをいだかせる

こともありました。

「これには、ご先祖せんぞのたましいがはいっているんです。」といつておかあさんがこの青い玉あお たまをだいにしたのも、ふしぎではありません。

おとうさんの持もっていた銀色ぎんいろのふえは、その音色ねいろを聞きくと、さびしいあらしうみにすさぶあらしのように、なんとなくひとりぼっちの感じかんを起おこさせたり、またあるときは、反対はんたいに心こころを引ひきたてて、のぞみとよろこびをもたせることもありました。

そして、このふえの音ねがとどくところ、魚さかなたちがその音ねをしたつてよつてくるので、思おもわぬ大漁たいりようがありました。

「まったくふしぎなふえじゃないか。」

「なんにしてもありがたいことだ。」

「漁りように出た人々ひとびとは、なみ子このおとうさんの銀色ぎんいろのふえを手にとつて、ふしぎそうにながめるのでした。」

このふえもやはり、おじいさんのころからつたわっていましたので、これにも先祖せんぞのたましいがこもっていると、おとうさんは信じていました。

なみ子こは、おとうさんが心こころをこめて、このふえをふいた日ひのことをおぼえています。

その日ひ、海うみの上うえには、黒い雲くもがはびこり、いかにも北きたの国くにらしいものすごいけしきでした。

雲くもの間あいだからいな光びかりがもれ、かみなりが鳴なっていました。

「こんな日ひには、はたはたがとれそうだ。」と、おとうさんはい
 いました。

そして、ひさしぶりに大漁たいりようにしてみんなをよろこばせたい
 と、銀色ぎんいろのふえを持つていきました。

おとうさんが船ふねの上でふえをふくと、たくさんの魚さかなが、波なみの上
 でおどりました。いかやさばも、むれをつくつてよつてきて、思おも
 わぬ大漁たいりようになりました。

「季節きせつはずれに、こんないろいろな魚さかながとれたのも、みんなふ
 えのおかげだ。」といつて、人々ひとびとは、浜はまに帰かえつてから酒さかもりを
 始はじめました。

そして、人々ひとびとは、お酒さけによいながら、おとうさんにそのふえ

をふいてもらつて、その音色ねいろに耳みみをかたむけていると、またあすのはたらきに新しいあたらしのぞみがわき、たとえ、海うみがあれなくても、命いのちをかけてはたらき、おたがいになかよくたすけあつていききたいという気持きもちちになるのです。

いさましく人々ひとびとの心こころをうきたてたあのときのふえの音色ねいろを、なみ子こは、いまでもおぼえていました。

「もう一度ど、楽したのかったあの時分じぶんになつてみたい。」と、なみ子こは思おもいました。

ある日ひ、青い玉あおたまと銀色ぎんいろのふえを持もち出だすと、すなはまの上うえで、おとうさんやおかあさんのことをしのびながら、じいつとながめていました。

「この青い玉は、おかあさんがだいじにしていらしたんだわ。あ、この銀色のふえは、おとうさんが、みんなとお魚をとるときにふいたんだわ。」

なみ子が、海の方を見ながらつぶやいていると、

「やあ、なみちゃんか。そんなところでなにをしているな。」と、そこを通りかかったおじいさんの漁師が声をかけました。

「海の夕日が、こんなに赤くうつるのは、おじいさん、おかあさんが、空からあたしを見ていらっしやるのかしら。」

なみ子は、青い玉にうつる美しい夕日をながめていました。

「おつかさんも、おとつつあんも、そりやあ、おまえさんをじいっと見まもっていてくださるな。早く大きく、りっぱなおとなに

なるのを待^まつていられるぞ。」と、おじいさんは答^{こた}えました。

「おじいさん、いまでもこのふえをふけば、お魚^{さかな}がよつてくるかしら。」

なみ子^こは、こんどは銀^{ぎん}色^{いろ}のふえをとり出^だして聞^ききました。

おじいさんは、なつかしそうに、にぶく光^{ひか}るふえをながめていました。

「そういえば、このごろしけで、魚^{さかな}がすくないんだな。魚^{さかな}がすくないと、ついつまらんことでなかまわれがしたり、けんかが起^おこったりする。おまえのおとつあんはりっぱな漁^{りょうし}師^しだったから、どんなときでもけんかなどしなかつたがな。」

おじいさんは、なみ子^このおとうさんを思^{おも}い出^だしてほめました。

「おじいさん、このふえをかしてあげましょう。よくふいて、たくさん、お魚さかなをとってください。」

なみ子こは、だいじなふえをさしだしました。

「ありがとう。おとうさんのかたみのふえをかりていいのかい。」

「魚さかながたくさんとれて、このはまの人ひとたちがなかよくなれたら、

おとうさんもきつとよろこんでくださるわ。」と、なみ子こは心こころから答こたえたのでした。

青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 14」講談社

1977（昭和52）年12月10日第1刷発行

1983（昭和58）年1月19日第5刷発行

底本の親本：「たのしい三年生」

1957（昭和32）年1月

初出：「たのしい三年生」

1957（昭和32）年1月

※表題は底本では、「青《あお》い玉《たま》と銀色《ぎんいろ》のふえ」となっています。

入力：特定非営利活動法人はるかぜ

校正：酒井裕二

2017年11月24日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

青い玉と銀色のふえ

小川未明

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>